文部科学省令和8年度日本語教師養成・研修推進拠点整備事業
北海道・東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2026

# 私たちが見た日本語教育の現場と魅力 ～ICA国際会話学院アスク札幌校～

2026年9月7日～8日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生が札幌に集まり、合宿を行いました。合宿では、札幌市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

## 学校の概要・特色




**ICA国際会話学院　アスク札幌校** https://asksapporo.icaschool.jp/

札幌市営地下鉄東豊線「学園前」から徒歩約10分に位置するICA国際会話学院アスク札幌校は、定員約120名、2026年9月時点で約80名が在籍しており、ミャンマー国籍をはじめ、バングラデシュやパキスタン、台湾、アメリカなど様々な国からの学習者を受け入れている学校です。在籍している学習者のほとんどが、日本での就職を目指している為、就職活動に特化したクラスでは、面接対策や履歴書の書き方などの指導を行なっていました。

更に、学内にはアルバイト情報や札幌市内のマップ、イベント情報だけではなく、携帯会社や賃貸情報などの「暮らし」に関する掲示物が掲載されていました。

校内は土足禁止で、上履きに履き替える必要があり、校内が清潔に保たれていた他、廊下から教室の中が見渡せるよう大きな窓が備え付けられており、開けた雰囲気の中、学習者が楽しく、前向きに日本語を学べる環境がとても魅力的だと感じました。

## 授業見学

私たちは去年入校した学習者14名で構成された中上級レベルのクラスを見学しました。授業では『できる日本語 中級 本冊』(アルク、2013年)第18課が使用されていました。

聴解の内容を確認する際に「(動詞)はどういう意味ですか？」といった基本的な質問だけでなく、窓辺にへちまを植えることへの利点が2つ紹介された際に「なぜこの行動をするといいですか？2つの理由は何ですか？」のように思考を促す質問も取り入れられており、学習者が自分の理解を言葉にする場面が多く設けられていました。ロールプレイ活動では隣の人同士だけでなく、縦列でもペアを組んで行うといった工夫があり、複数の学習者と活動を行う機会が設けられていました。そして、発表後には周囲の学習者がアドバイスや感想を伝えるなど、学習者が学び合う様子が印象的でした。

学習者は終始積極的に発言しており、就職コースということもあって始業時間への意識も高かったです。教師は明るく前向きな姿勢で、学習者の発話が不明瞭なときには「なに？」「ん？」と声をかけて発話の流れを途切れさせないようにしていました。また、質問の難易度を調整したり、集中力を保つためにランダムで指名したりするなど、学習者の状態を細かく見ながら授業を進めていました。加えて、学習者が脱落させやすい「ん」の付く語に焦点を当てたり、音だけでは理解しにくい語を板書したりするなど、理解を助ける工夫も随所に見られました。

今回の授業見学で特に印象に残ったことは2つあります。まず、学習者が自分の言葉で話す機会が豊富に準備されていたことです。語彙の意味を説明したり、自国の文化や習慣を簡単に紹介したりする場面があり、学習内容が生活と自然に繋がっていました。加えて、学習者が日本語でどう伝えればいいかを考えている際に、教師がすぐに答えを出さずに待っていたことです。こうした学習者の能力を尊重する姿勢は日本語教師として重要だと感じました。

## 講師インタビュー

**日本語ができないだけ**

今回、インタビューをさせていただいた講師のM先生のお話の中で、特に印象に残ったのは、「彼らは、子供ではない。日本語ができないだけ。」という言葉です。教室には、様々な経験や経歴を持つ大人が、日本語を学びに来ています。教師が教えられるのは日本語ですが、それ以外の面では、教師よりも豊かな経験を持っている人もいます。M先生は、学生とは、「友達なのか」といえば、友達というわけではないものの、関わる中では友達のような瞬間もあれば、家族のような瞬間もあり、もちろん教師として関わる瞬間もあるとお話しされていました。こうした様々な関係性が生まれることが、日本語学校独特のところなのだそうです。日本語を学んでいるという一点だけで、学生を教わる側と決めつけない。これまで歩んできた人生や経験を持つ、一人の大人として向き合うことが、日本語教師には求められているのかもしれません。

**Q.頑張って日本語を話そうとする学生をどのようにサポートしていますか？**

学生が授業内で答えに詰まった際は、すぐに助けるのではなく、まずは少し待つことを心がけているそうです。「ゆっくりで大丈夫ですよ」と声をかけたり、最初の文字だけを伝えたりして、学生自身が答えを出せるようにサポートしているとのことでした。また、他の学生が助けてくれることもあるそうです。教師がすぐに答えを教えるのではなく、学生が自分で考える時間をつくることが大切なのだと感じました。

**Q.雰囲気作りで心がけていることは何ですか？**

異国に来たばかりの学生は、寂しさや不安を抱えていることも多いため、まずは教師と学生の距離を縮めることを大切にしているそうです。「信頼できる人間であり、サポートしたい」という気持ちを、言葉だけでなく態度でも伝えるように心がけているといいます。また、学生同士のつながりも意識し、異なる国の学生同士が互いを知るきっかけもつくっているそうです。安心して学べる環境には、教師と学生、そして学生同士のつながりが大切なのだと感じました。

**Q.日本語教師を続けてこられた理由、やりがいは何ですか？**

授業そのものを「楽しい」と感じていることや、学生との関わりが続けてこられた理由の一つだそうです。授業がうまくできたときや、学生の理解・成長を感じた時にやりがいを感じるとお話されていました。そして、「授業をしたい」「みんなと日本語を勉強したい」と思うほど、授業そのものを楽しんでいるそうです。学生と関わることへの「好き」や「楽しい」という気持ちが教師を続ける原動力になっているのだと感じました。

## 訪問の感想

日本語学校を訪問し、特に印象に残ったのは、日本語だけでなく、日本で生活するための知識やルールについても伝えていたことです。日本人には当たり前のことでも、初めて日本で生活する学習者にとっては、重要な知識や言葉になります。そのため、母語では理解できる内容でも、日本語ではまだ理解が難しい内容であっても、生活上重要なことであれば、きちんと伝えることが重要という点が新たな気づきでした。また、外国語としての日本語学習は、学習者が何も知らない状態から知識を得るものではなく、すでに母語で持っている知識や経験と、日本語の語彙や表現を結びつけていくことでもあるのだと改めて感じました。　N.K.(北海学園大学)

日本語学校を訪問する前は、語彙の説明は極力日本語で行うべきだと思っていました。しかし、学習者から「時々英語で説明すると分かりやすいです。」と聞き、見学中にも「幅」という語をイラストと英単語で補足していた場面を思い出し、英語を使って説明しても良いと気づくことができました。授業では、学習者が問いかけに対して自分の意見や自国の文化を積極的に伝えており、問いかけが学習者の発話を自然に引き出していることを実感しました。大学での模擬授業経験からは、教科書にない問いかけをすることは難しいと感じていたため、「皆さんの国ではどうですか？」「皆さん、自転車欲しいですか？」といった問いかけを豊富に取り入れていた教師の工夫を見習いたいと思いました。　T.M.(北海道教育大学函館校)

今回の合宿で、初めて日本語学校を訪問し、たくさんの学びを得られました。実際に授業を見学させていただき、日本語教師という職業がどんなものなのかを目の当たりにしました。人としてのマナーを教えることはもちろん、授業を進める中にもジェスチャーだけではなく、表情、わかりやすい言葉に言い換えることなど、様々な工夫が隠れていました。印象的だったのは、クラスの中で教師と学習者はもちろん、学習者同士で助け合いコミュニケーションを取りながら授業を行っていたことです。実際に、学習者から「学校が楽しい」「勉強をもっと頑張りたい」との声を聞いて、日本語を教えるだけではなく、そこには学習者がワクワクできる魅力が沢山詰まっているんだなと思いました。　W.R.(北海道文教大学)